

以上我々は Racine の四つの悲劇を“情念に憑かれた人間”と“道徳律に支配された人間”の“対立”という共通の枠組に着目しつつ検討してきた。そして *Andromaque* から *Phèdre* へと順次その具体相を辿ることによって、そこにある種々の方向性をもった変化が存在することを明らかにしてきた。即ち、“対立”の徹底化というのがそれである。

*Andromaque* における *Andromaque* ↔ *Pyrrhus* の“対立”は極限にまで押し進められることなく、*Pyrrhus* の横死によって中断される。不可能な二者択一を迫られた *Andromaque* は現世からの離脱を望み、自決の意図を表明するが、しかし *Pyrrhus* に対し徹底的な拒否と抵抗を貫くことはできない。*Andromaque* は「拒否の栄光」を選ぼうとしながら果せず、彼女の自己否定は意図されるのみに終る。この悲劇では“対立”も、自己否定も可能性の段階にとどまると言えよう。なお附言すれば、この悲劇では *Oreste*、*Hermione* といった“情念に憑かれた人間”達がかなりの比重を占め、“対立”そのものは舞台の周辺部に位置するにとどまるのである。

*Britannicus* では、*Junie* ↔ *Néron* の“対立”は極限にまで押し進められる。*Junie* は *Néron* に対し徹底的に拒否の姿勢を貫き通し、彼の脅迫を斥けて「拒否の栄光」を選びとる。それがために、彼女は愛する *Britannicus* を殺害され、現世での生を断念して *Vesta* の神殿に身を隠すことになる。この悲劇に於て *Junie* の占める位置は確かに大きいものとは言えないが、*Andromaque* が意図するのみで果せなかった拒絶と自己否定が、可能性の段階から一段階進められ、舞台上で実現されているのである。

*Bérénice* においては *Titus* ↔ *Bérénice* の“対立”が舞台をほぼ全面的に占領することになる。*Britannicus* の場合同様、ここでも“対立”は極限にまで押し進められるが、その極点に於て、*Bérénice* は *Titus* の世界観を理解し、それを共有するに至る。最後の瞬間に“対立”は解消し、ローマの掟という絶対的な道徳律の前にあらゆる妥協を拒否して一身を犠牲にする *Titus* に倣い、*Bérénice* もまた自身を捨て去るのである。表面的には *Titus* は皇帝という世俗的地位に留まるように見えるかもしれないが、*Titus*、*Bérénice* 双方にとって別離後の孤独な生が、*Vesta* の神殿に身を捧げた *Junie* の生同様、死に等しいものであることは言うまでも

ない。*Bérénice* に於ける“対立”は、*Bérénice* が *Titus* に導かれて *Pyrrhus* や *Néron* の如き“情念に憑かれた人間”から *Junie* の如き“悲劇的人間”へと自己変革する過程と見ることができ、この悲劇全体を *Titus* と *Bérénice* の“回心”（自己否定）への過程と見なすことも可能であろう。

*Phèdre* では“対立”は *Phèdre* の内面で展開される。上記三悲劇で“対立”の場を構成していた複数の人物，“道徳律に支配された人間”と“情念に憑かれた人間”とが *Phèdre* の内部に共存し、同時に自己主張を行う。しかもそれらの主張する相容れない二つの要求が神々（*Vénus* と *Soleil*）の絶対的な意志として *Phèdre* にのしかかるのであるから、彼女には如何なる調和の手段も逃げ道も存在しない。理性に奪われ錯乱状態で行動しながら、彼女は自己の盲目的な行為を余すところなく明視し、且つそれを自己の道徳律に則して裁かねばならない。*Phèdre* の内面の分裂は極限に達し、彼女に残された道は、そのような神々の相反する意志の“対立”の場としての自己の存在を否定することのみである。*Hippolyte* への不倫の愛と *Thésée* への貞節という相容れない二つの要求に引き裂かれた *Phèdre* は、そのどちらも実現することができず、またその内面を誰からも理解されないまま自殺することによって文字通り自己否定を完遂するのである。この悲劇では *Phèdre* の内面そのものが即ち舞台となり、彼女の独白によって示される“対立”が舞台を全面的に領することになる。

このように“対立”は *Andromaque* では不完全な形で、舞台の一部を占めるにすぎないが、*Britannicus* では完全な形をとり、*Bérénice* では舞台の中央を占めることとなる。そして *Phèdre* では舞台全体を占領するにいたる。また自己の信ずる価値体系、道徳律を遵守して譲らぬ“悲劇的人間”の“自己否定”について言えば、*Andromaque* の意図されるのみの死から、*Junie*, *Titus*, *Bérénice* の死に等しい生をへて、*Phèdre* での文字通りの死（自殺）へと徹底化されている。即ち、これらの悲劇は“対立”、その結果としての“自己否定”の中心化、徹底化という方向性をもって *Phèdre* へと収斂していると言えよう。

そして“悲劇的人間”（道徳律に支配された人間）達に完全なる無理解や誤解を対置することによって彼らとの断絶を露呈しつつ、彼らの現世離脱の瞬間を準備し、より鮮明にする役割を果していたのが、四悲劇すべてにおいて、世の通常の論理と価値観に従う情念に支配された人間達であったことを確認しておこう。

周圀の者からは狂気の行為と看做されることを知りながら、そうした無理解と対立しつつ、それが神の意志にかなうことをひそかに願って、自分のあらゆる社会的機能を断ち切って隠退したのは *Antoine Le Maître* であったが、それと同じ構造

の思想と行動を“対立”と“自己否定”（自己の信ずる価値体系、道徳律への殉教）という形式で、悲劇によって展開した Racine は、それを *Andromaque* から *Phèdre* へと順次徹底化し、収束させていったのである。かくして、すべてを *Phèdre* の内面という舞台に凝集させた後、Racine は長い沈黙に入るのである。

悲劇詩人 Racine となるために Port-Royal に背を向けて劇作に身を投じた Racine は以後専ら Port-Royal から遠ざかることを意図していたかの如くである。あまりにも大きい Port-Royal の恩義の重荷に耐えかねて彼は恩知らずの裏切者となる他は無かったのかもしれない。しかしながら、彼の表面上の行為が最も Port-Royal から遠ざかっていたかに見えるその時期に彼が生み出した悲劇は、その内部に於て、世の支配的価値体系を昂然と否定し現世から離脱した恩師 Antoine Le Maître の思想と行動の構造に極めて相似た思考形態と行動様式を持った人間像を展開していたのである。しかもそれらの悲劇自体が、そのような人間像、その思考形態と行動様式を浮き彫りにし、より鮮明にするような構造を有していたのである。

Port-Royal を可能な限り離れるべく船出した Racine が、そこから最も隔っていた時、その船先は、あたかも引力から逃れられない球体上の運動の如くに、既に出発点の Port-Royal を指して進みつつあったかに思われる。

Racine の悲劇を珠玉とする陳腐な譬喩に即して、その詩句を真珠の光沢でもって喩えることが許されるとすれば、Racine という母貝に核を投じたのは Antoine Le Maître であつたとは言えないだろうか。

## 参 考 文 献

参照した文献は多数に上るので、ここでは主に参考にした書目のみを記しておくこととする。

- Antoine Adam : Histoire de la Littérature Française au XVII<sup>e</sup> siècle.  
(del DUCA Paris)
- ” : Du mysticisme à la révolte. (Fayard)
- Louis Congnet : Le jansénisme, “Que sais-je?”. (P. U. F.)

- Lucien Goldmann : Le dieu caché. (Gallimard)  
 " : Racine. (L'Arche)  
 " : Situation de la critique racinienne.  
 (L'Arche)
- Charles Mauron : L'inconscient dans l'œuvres et la vie de Racine.  
 (José Corti)
- Jean Orcibal : Saint-Cyran et le jansénisme. "Maîtres spirituels"  
 (Edition du Seuil)
- Raymond Picard : La carrière de Jean Racine. (Gallimard)  
 " : De Racine au Parthénon. (Gallimard)
- Sainte-Beuve : Port-Royal. "Bibliothèque de la Pléiade"  
 (Gallimard)
- Pierre-Thomas Du Fossé : Mémoires. (Slatkine Reprints)
- Claude Lancelot : Mémoires. (Slatkine Reprints)

- 戸 張 智 雄 : ラシーヌとギリシア悲劇  
 (東京大学出版会)
- 中 村 雄二郎 : パスカルとその時代  
 (東京大学出版会)
- 飯 塚 勝 久 : ジャンセニスムとポール・ロワイヤル尼僧院  
 — 近代思想におけるその役割 —  
 『思想』1976年1月号, (岩波書店)
- 落 合 太 郎 : ポール＝ロワイヤル運動  
 落合太郎著作集所収 (筑摩書房)
- 支 倉 崇 晴 : ジャンセニスム  
 “フランス文学講座”第五卷所収 (大修館)